CROSS
自己変容を通し

東京プロジェクトスタディ 3

WAY
て、背景の異な

TOKYO
る他者と関わる

tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

ARTS COUNCIL TOKYO

文化でつながる。未来につながる。
THE FUTURE IS ART
Tokyo Tokyo FESTIVAL

自分とは異なるルーツを持つ人とコミュニケーションをとろうとするとき、何かしらのハードルを感じる人は多いのではないでしょうか。
この冊子は、Tokyo Art Research Lab（TARL）「東京プロジェクトスタディ3 ―自己変容を通して、背景が異なる他者と関わる」のプロセスをまとめたドキュメントブックです。スタディでの活動のなかで生まれた議論、思考を記録した「スタディ」パート、スタディを通して立ち上げたメディアを紹介する「メディア」パート、2つのパートで構成されています。これは、新たな《メディア》への案内状です。このドキュメントブックを手にした方が、日常生活を過ごすなかで、異なるルーツを持つ他者と関わることについて見つめなおしてみる機会となれば幸いです。

＊東京プロジェクトスタディとは
“東京で何かを「つくる」としたら”という投げかけのもと、「ナビゲーター」と、公募で集まった「メンバー」がチームとなり、リサーチや実験を繰り返しながら新たなプロジェクトの核をつくる試みです。ナビゲーターは、アーティストやディレクター、デザイナーなどのつくり手。演劇、美術、パフォーマンス、写真、映像など、表現方法や「つくる」過程もさまざまです。それぞれの問題意識や興味から、スタディ（勉強、調査、研究、試作）を展開します。

CROSS WAY TOKYO

自己変容を通して、背景の異なる他者と関わる

「Cross Way Tokyo」では、ナビゲーターと公募で集ったメンバーが「自己変容を通して、背景の異なる他者と関わる」というテーマをもとに、全12回の活動を重ねていきました。

前半は、専門家を招いたディスカッションやフィールドワークを重ね、自分が他者との間に設けてしまっている「ハードル」の見極めを試みることからはじめました。

それらを経て、後半は各メンバーの個人活動へ移行し、それぞれの興味関心を軸にしながら、自分がつくりたい／つくることができるメディアを模索していきました。各自で他者と関わるためのトライアルを重ね、メンバー同士で意見交換をしながら、最終的に自身のメディアを立ち上げることに取り組みました。

スタディとしての活動終了後、個々のメディアを束ねたウェブサイト「関わりの記録」を公開。このウェブサイトは、今後も各メンバーにより運営されていきます。

全12回活動レポート
《東京プロジェクトスタディ アーカイブサイト》
https://www.tokyoprojectstudy.jp/2020/study3/

#1	2020.08.22	**私にとっての「移民」とは** 自己紹介／ディスカッション ＊（オンライン開催）
#2	2020.09.05	**移民を取り巻く構造を現場から学ぶ** レクチャー／ GUEST 海老原周子［一般社団法人 kuriya 代表］＊
#3	2020.09.26	**ハードルを越えるための「態度」を探る** ディスカッション／ワークショップ
#4	2020.10.10	**上野のまちで、他者の存在に目を凝らす** フィールドワーク／ GUEST 金村詩恩［ライター・エッセイスト］
#5	2020.10.24	**身の回りの日常を他者の視点で捉え直す** フィールドワーク／プレゼンテーション／ディスカッション
#6	2020.11.21	**メディアの構築性を学ぶ** レクチャー／映画制作ワークショップ／ GUEST 川瀬 慈［映像人類学者］
#7		**トライアル作品製作** 自主活動
#8	2020.12.19	**トライアル作品を共有する** プレゼンテーション／ディスカッション
#9	2021.01.09	**メディア製作のための準備** ショートレクチャー／ディスカッション ＊
#10		**メディア製作** 自主活動
#11	2021.02.27	**ゲスト再登場、フィードバックセッション** フィードバック／ GUEST 金村詩恩・川瀬 慈 ＊
#12	2021.03.28	**8 ヶ月間の歩みを振り返る** ディスカッション／パーソナルワーク

スタディテーマ設定の背景や意図、活動を重ねるなかで大事にしていたこと。チームの旗振り役であるナビゲーターが考えてきたことを綴ります。

TEXT：阿部航太［ナビゲーター］

あべ・こうた　デザイナー／文化人類学専攻

1986年生まれ、埼玉県出身。2009年ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校卒業後、廣村デザイン事務所入社。2018年同社退社後、「デザイン・文化人類学」を指針にフリーランスとして活動をはじめる。2018年10月から2019年3月までブラジル・サンパウロに滞在し、現地のストリートカルチャーに関する複数のプロジェクトを実施。帰国後、阿部航太事務所を開設し、同年にストリートイノベーションチームTrash Talk Clubに参画。アーティストとデザイナーによる本のインディペンデントレーベルKite所属。

このスタディを企画した経緯

わたしは異なる文化に触れることが好きです。自分には無かった視点や、色、味を体験することで、自分がより自由になる感覚が得られるからです。しかし、自分が拠点を置く日本、東京において、海外にルーツを持つ人々に対して同じように興味を抱いたとしても、そこに触れることを尻込みしてしまいます。歴史や構造を勉強すればするほど、自分の興味関心はステレオタイプのものではないか？搾取の構造をつくってはいないか？と自問自答する項目が増え、その結果どんどんと話しかけるのに臆病になっていきました。この悩みがこのスタディを企画するきっかけになっています。とても個人的な悩みではあるものの、似たような思いを抱いている人たちも少なくないのでは、という感覚がありました。

「自己変容を通して、背景が異なる他者と関わる」というテーマについて

上記のように企画の趣旨は海外にルーツに持つ人たちとの関わりを目指すというものでしたが、テーマを言語化する際に、「移民」という言葉を使うことに抵抗感がありました。わたし自身が持っていたステレオタイプのイメージによる乱暴なカテゴライズは避けたいという思い、また日本にルーツを持つ人たちだけではなく、当事者である海外にルーツを持つ人たちにも参加してもらいたいという思い。このふたつから「背景が異なる他者」という言葉を選びました。

そして、頭には「自己変容を通して」という言葉を加えました。違いをただ外から眺めるだけでなく、違いに身を任せることで自身が変容していく。そのプロセスがここで言う「関わり」ではないかと考えたからです。ただし、変容は口で言うほど容易くなく、ショックを受け、狼狽（うろた）えることも多々あります。それでもそこにある豊かさを楽しむことを、このスタディのテーマに据えました。

なぜメディアを立ち上げるのか

このスタディでは、メンバーそれぞれが「メディア」を立ち上げることを最終目標として設定しました。ここでのメディアは「自身の体験や考えを第三者へ伝える表現・表現媒体」と定義していますが、ポイントは「第三者」です。というのも、このスタディのテーマは今日の東京、日本において、誰もが避けては通れない重要なものです。そこへの取り組みが、限定されたアートプロジェクトの中だけに留まらないよう、このスタディに参加していない人たちにも伝えていくことが必要であると考えました。とても個人的な体験や関わりであったとしても、第三者を意識し、いかに工夫して伝えられるかを考えることもスタディの重要な要素でした。

出会うことと語ること、そしてその理由

「慎重になりすぎてもしょうがない、失敗を恐れないで」というのは、3名のゲストの方々が共通して語っていたことです。しかし、そう簡単に恐れは消えません。なぜなら「失敗」は自分が傷つくこととともに、関わろうとする相手を傷つけてしまうことも含んでいるからです。その恐れから、関わる以前に「出会えない」という悩みを抱えるメンバーも多くいました。スタディを通し、一貫してこのハードルを越える方法を探ろうとしましたが、そこに対する効率的な答えなどなく、結局のところ「外へ出て、出会うまでひたすら歩く」しかない、という結論に至ったように思います。他者と関係を築きたいと思うのなら、自分のコンフォートゾーンの外へ出て、多少ぎこちなくても、わざとらしくとも、話しかけなければなりません。

そして、運良く関係の端っこをつかんだとして、ここで次のハードルがあります。「どのようにこの関わりを語ったらよいのだろうか?」失敗が怖いからこそ、誰かが提示した“正解”をどうしても求めてしまう。しかし、専門家でもない私たちがただ正解を模倣しようとすると、目の前の他者の存在を無視する不誠実な態度になってしまいます。だからこそ、借り物のキャッチフレーズではなく、「自分の言葉で話す」ことの重要さを、スタディが進むにつれ気づいていきました。たとえ失敗を犯したとしても、自分の言葉がそこにあれば、他者との信頼関係を築くことを支えてくれるはずです。

「外へ出て、出会うまでひたすら歩く」ことと「自分の言葉で話す」こと。この二つの方法は、ある意味ただの根性論のように聞こえますし、その頑張り方がそもそもわからない、という声もあると思います。この点において、スタディの中で役に立ったのが「メディアをつくる」という理由でした。この理由が自身を駆り立てたことで、真剣に悩み、自分の言葉を模索することができたのだと思います。一方で、他者のアイデンティティに関連した表現をする、という行為の中に消費や搾取の構造があることを忘れてはいけません。しかし、その構造を意識し引き受けながらも、自身の思う豊かさへ向かうために「表現する」という行為は、新しい関わりを生むきっかけになり得る。スタディを終えた今、そう考えるようになりました。

全12回のスタディを経て、私たちは出会うためにとりあえず外へは出られたのだと思います。それはまだまだ自分たちの手が届く近所でしかないかもしれません。ただそこで発された言葉は、この文章を読んでいるあなたの近所でも聞こえ得る声なのではないでしょうか。

自身と向き合い、問いや悩みを抱えながら進めていったCross Way Tokyo。活動を記録し続けてきたライターからの視点で、メンバー2名の実践を通して、試行錯誤や変容の断片を探ります。

TEXT：鷲見洋之［運営スタッフ／記録］

すみ・ひろゆき　ノンフィクションライター

岐阜県生まれ。大阪外国語大学スウェーデン語科卒。大学在学中にカルチャーマガジン「Radio Tope」を創刊。新聞社・ネットメディア記者を経て独立し、国内外の社会問題から若者文化まで様々なテーマで取材。Forbes Japanオフィシャルコラムニスト。

他者は理解できない

「他者と関わる」とは、どういうことだろうか。

フランス文学者の内田樹は著書の中で、「他者論」で知られる哲学者エマニュエル・レヴィナスが論じたユダヤ教における賢者とその「師」の関係について、次のように噛み砕いて解説している。

もし、優れた弟子には師を「理解する」ことが可能であるとしたら、理論的には、弟子が全員優れていた場合、彼らの「理解」はまったく同一のものに帰着することになる。そのようなn人の弟子たちのあいだに斉一的な理解が成立したとき、弟子たちひとりひとりの存在価値は一挙にn分の1になってしまう。彼らはかけがえのない弟子ではなく、「替えがいくらでもいる」弟子になってしまうからだ。だから、師が「理解を超えている」ことは、弟子の唯一無二性を基礎づけるために必須の条件なのである。（内田樹『レヴィナスと愛の現象学』文春文庫）

この解説の「師」を「他者」と置き換えて読み直してみると、なんとなくだが「他者と私の関係性がどういうものか」をイメージできる気がする。
不勉強の愚人なりに解釈すると、「他者を理解することはできない。できないことが私を私たらしめている」ということではないだろうか。

私たちが見知らぬ「他者」を考える時、人物シルエットのような空白のイメージを思い浮かべる人はあまりいない。その「他者」がどんなものであれ、すでに知っている誰かや何者かのイメージ、自身の経験などを自然と記憶から引っ張り出してきて「他者」の認識に利用しているように思う。

例えば、さっきNetflixの人気リアリティショーに出ていた、白人のヒゲモジャのマッチョなアメリカ人の男。
「白人」「ヒゲ」「マッチョ」という要素が揃っているだけで、地球上には何億人もの白人がいるにも関わらず、私はなんとなく、いつか見たトランプ前大統領支持者の姿形に似てると思い「この人もそうかな？」などと勝手な像をつくり上げかけた。
他者を考える時や、他者に出会った時、いかに思いこみや幻想、体験などにとらわれない形で（要は先入観や事前情報に捉われず）シルエットを埋めていけるかが難しい。しかも冒頭の内田の解説を参照すれば、「他者はこうすれば理解できる」といった解が書かれた教科書は存在しない。だが一方でそのことが私たちの存在や人生をかけがえのないものにしている。

次に、「関わる」という言葉も曲者だ。一緒に誰かと何かをしたり、誰かに挨拶し自己紹介を交わせば関わったことになるのだろうか。いや、少し足りない感じがする。もう少し射程の長い言葉なのではと思う。
人と意見を交わしたり、助け合ったりすることで、生きる意味を考えたり、人生の指針や羅針盤のような何かを得たりする、そして物事の見方が変わり、もう二度と「関わる」前の自分には戻れなくなる。この不可逆性が、「他者と関わる」

ということであり、その最もエキサイティングな部分ではないだろうか。

私見をこれ以上雑記しても退屈かと思うので本題に入る。
私は、アーツカウンシル東京の人材育成事業「Tokyo Art Research Lab」（TARL）の一環として2020年8月から約8ヶ月かけて行われたスタディ「Cross Way Tokyo ―自己変容を通して、背景が異なる他者と関わる」で記録執筆を務めてきた。
ここではスタディを通して、“不可逆的な体験”を地で行くメンバー2人の姿を、スタディ前後の歩みや8ヶ月間の思考の変遷を辿りながら紹介しつつ、目下制作を進めているプロジェクトの中身も伝えたいと思う。

揺れる／ミャンマー

2021年2月1日、新聞を開いた私は、ある見出しに目が止まった。

「スーチー氏拘束、事実上のクーデターか　街には兵士の姿」

それはミャンマー国軍によるクーデターの一報だった。私はすぐにスタディ参加メンバーの宮原朋之のことを考えた。彼は理想の地としてミャンマーに長期滞在しようと準備を進めていたからだ。
しかし意外なことに宮原には、それは最初“なんとなく興味をひく”程度のニュースだったという。

「それくらい、あの国のことを分かっていなかったんだと思います。正直、当日や2日目くらいまでは、あくまで一時的な事件でそこまで重要なニュースとは考えていなかったんです」

大学を卒業してから15年あまりにわたり、イベント制作やメディアに関わる仕事をしてきた。ほとんどがデスクワークで、朝から晩まで同じ姿勢でパソコンを睨み、キーボードを叩く日々が続いていた。
30代になってから、徐々に背中に痺れを感じるようになった。最初のうちはただの違和感だったものが次第に痛みに変わり、ついには夜寝られないまでになった。

病院に行くと頸椎部のヘルニアと診断された。首の後ろの軟骨がすり減ってしまっているらしく、レントゲンを撮ると、健康な人の場合はCの字のような形になるべき首の骨がSの字になっていた。何をしていても、首から下にかけて鈍痛を感じる状態だったという。
首の不調と不眠の矛先は、次第に宮原の内面に向かうようになった。
「イライラしたり、がっかりしたり。気持ちが制御できなくなってきたんです」
悪循環は続いた。不眠が原因で、朝になって睡魔に襲われる。だから仕事もままならない。病院で精密検査を受け、薬を処方してもらったりするものの、良くならない。
私は、この時ヘルニアや不眠とは別の存在も宮原の心に影を落としていたように思う。それは、それまで無意識のうちに少しずつ内面に積み上がっていた、日本社会に対する複雑な思いだ。宮原は次のように語っていた。

「自分も含めてですが、人々が自分のことしか考えていないように思えたんです。自分が楽しく生きるために行動しているというか。これを見てそう思った、という明確なものはないですが…」

例えば旅行に行って癒しを得るとしても、それは一時的なもので不眠やヘルニアが治るわけでもないー。そこで挑戦してみたのが、デジタル機器の利用を控えるまたは断つことでストレス軽減を図る「デジタルデトックス」だった。
2019年11月末、京都・丹波の山あいの合宿所で定期的に開かれていた10日間の「ヴィパッサナー瞑想合宿」に参加した。ヴィパッサナー瞑想とはインドの古い瞑想法の一つ。宮原が参加した合宿所は、ミャンマー出身の著名な指導者の教えに基づき運営されているという。

当時は巷でマインドフルネスが注目を集めていたこともあり、宮原のほかに60人くらいの男女が国内外から参加していた。合宿所に着くとまずスマホなどのデジタル機器や本、財布などを運営の人に預ける。初日に軽いオリエンを受けてからは、スケジュールに従い夜9時就寝、朝4時起床の生活で、ほとんどの時間は座禅を組んで過ごす。寝る前には1、2時間の講話も聞く。現代人にとってはもはや異常な環境だ。脱落者も多かったという。だが宮原は辛くなかった。むしろ8、9日目には心身の調子が好転しているのを感じた。不思議と背中の痺れや痛みがなくなった。
また「瞑想を通して利他性を感じられた」とも語る。確かに日本ヴィパッサナー協会のウェブサイトには、瞑想を続けることで「他の人々の苦しみに対してより敏感になり、人びとの苦しみを取り除くためにできる限りのことをしようと考えるようになります」と書かれていた。

前置きが長くなったが、この、瞑想を通じたミャンマーとの出会いは宮原のストーリーを語る上で欠かせない。半年後の2020年夏、宮原はCross Way Tokyoに参加。ミャンマーとの関わりを深めていく。

スタディに参加した理由について、「アートプロジェクトへの興味は以前からありました。既存のプロジェクトにボランティアとして参加するのではなくて、自分ごととして一からどんなことができるか考えたいと思っていました」と語る。

Cross Way Tokyoには、「自己変容を通して、背景が異なる他者と関わる」という副題が付いている。どこに惹かれたのだろうと私は気になった。

「“自己変容”という言葉には期待していました。変わる機会が欲しかったんでしょうね」と当時の自分に話しかけるように呟く。また自身のこれまでのキャリアから、「自分のメディアをつくる」というスタディの最終目標に対しても「何かしらできそう」といくらかの自信があった。

瞑想合宿以来、ミャンマーに興味を抱いた宮原は関東の上座部仏教の僧院に「興味があるんですが…」などと電話をし、コンタクトを試みていた。だが電話の相手は片言の日本語で、うまくこちらの意図が伝えるのが難しい。ようやく聞き出せたのは、新型コロナウイルス感染拡大の影響から通常予定されている催事はすべて中止しているということだった。
そんな中、スタディでメンバーから「ミャンマー人の友人がお坊さんにご飯をつくっている」という話を聞いた。「そうした催しはやってるのか」と知った宮原は再度電話をし、「寺に伺いたい」と伝えた。
するとすんなりOKをもらえ、とんとん拍子に話が進み、埼玉・北越谷に住むミャンマー人たちと知り合った。北越谷にはミャンマー人コミュニティがあり、20代前半を中心に70人程度が住んでいるという。その1人、Tという男と仲良くなった。
ミャンマー人たちと共にバスに揺られ北越谷から寺に行ったりもした。車内ではTと、スマホでグーグル翻訳を使いながら会話をした。
「日本人は僕だけで、あとはミャンマー人。そういう状況で1時間も2時間もバスに乗っていく。この体験をしているのは僕しかいない。その時の雰囲気がすごい新鮮で良かった」
ミャンマー人の素朴さや親切さも印象的だった。
「いつも自分のことを気にかけてくれて、ご飯をよそってくれたり、聞いてもないのにミャンマーの食事について詳しく教えてくれたり。ミャンマー人同士でも、若いのに“誰がリーダー役”というわけでもなく進んで食器を洗ったり片付けたりしていて自律的でした」

この関わりは何かしら形にできるかもと高揚しながら、プロジェクトの方向性

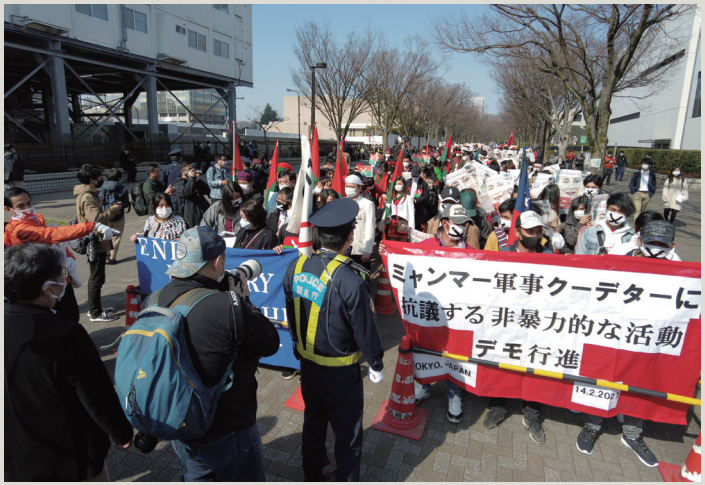
を考えた。ただ、はやる気持ちの一方で、宮原は慎重でもあった。
「スタディ開始から一貫して考えていたのが、メディアとして表現する時にどうしても介在する自分のエゴと、その対象（であるミャンマー人）という2つのバランスをどう落とし込むかということでした」
私は、宮原はほかのメンバーよりも一層この問題を大切にしていたと思う。勝手な憶測だが、メディア関係の仕事をしてきた宮原にとって、メディアは必然的に暴力性を内包しているということを知っていたからではないだろうか。スタディでも「これ誰に何のために伝えるんだっけとか悩んじゃって。立場の強い人・弱い人という関係値が、私と彼らの間にもある。当事者同士はお互い了承の上でつくっていたとしても、第三者が見た時に両者の立場の優劣を感じる可能性は拭えない」と悩んでいた。
思案するうちにおぼろげながら浮かんできたのが、コミュニティが抱える、ミャンマー人同士のコミュニケーション不足などの課題を解きほぐすきっかけになりコミュニティを活性するようなメディアだった。
もう少し具体的には、宮原が取材や執筆などを行うが、あくまで黒子として存在感を消し、取材対象者に編集長となってもらう。北越谷のお気に入りスポットや、食生活の楽しみ方などを語ってもらい、冊子のような媒体にまとめる。
早速モックアップをつくり、何人かのミャンマー人に勇んで見せてみた。
だが、返ってきたのは何とも言えない反応で、「それは他人行儀の“いいね”でした」
もちろん望んだ結果とは違ったが一方で、新たな気づきもあった。
「コミュニティのため、と言っていましたが、結局自分がコミュニティに入り、ミャンマーのことを知りたい、彼らと仲良くなりたいという本音があったんです」
自分の内にあった魂胆を自ら認め、スタディの他メンバーからの助言なども聞くうち、「いったんは反応とか気にしないで、続けてみよう」と開き直った。

そして2月1日。クーデターが起きた。
コミュニティのための情報発信をコツコツしていこうと決心した矢先のことだっただけに、宮原にとっては青天の霹靂だったと思う。
宮原の構想では、冊子の中でミャンマーの人たちに好きな食べものや将来の夢、休日の過ごし方などの質問に答えてもらうイメージだった。一方でテレビは、国軍が市民を銃撃したり、市民に暴力を振るうミャンマーの危機的状況を伝えていた。

「もう、つくっている誌面と現実のギャップが凄まじくて…。“こんなことやってる場合じゃない”と頭を抱えてしまいました」

都内のミャンマー人たちのデモにも同行したがそこで痛感したのは、結局自分ではどうにもならないスケールの話であるという、現実の途方もない深刻性。そんな状況で、自分には何ができるのかー。考えた末、「個人的な思いを日記形式で綴っていくほかない。自分の視点で感情や事実を線的に伝えれば、マスの報道とは別の見方をしてもらえるんじゃないだろうか」という答えに達した。
プロジェクトを「日本ミャンマー 個人的友好活動」と名付け、これまでの自身とミャンマーとの関わりを思い出しつつ、不定期で更新することにした。

クーデターで改めて分かったこともあったという。例えば、ミャンマー人の強さ。
「クーデターに一致団結して抵抗するという1つの精神的なまとまりがある。あれは日本人には真似できないと思います」
そして日本人とミャンマー人の溝。
「デモに参加して一緒に行進していると、沿道を歩く人たちの無関心さが痛い



ミャンマー軍事クーデターに抗議するデモ 渋谷の公園通りで待機する約3000人の在日ミャンマー人
2021年2月14日　撮影 宮原朋之

ほど分かるんです。つい最近まで、自分も“沿道の側”にいたなと」

スタディが終了して約2ヶ月後、私は再び宮原に連絡をとった。宮原は、この間の自身の心境の変化を率直に語った。
「クーデターのことを気にして、ミャンマーの人たちとしばらく距離を置いていたんです。スタディ中に良い関係になれた人もいたのに、さらに踏み込むタイミングを逃してしまった。クーデターがなかったら継続して関われていたのですが」
気を遣うあまり取材や交流をストップしていたようだ。またミャンマーへの思いも、少し揺らいでいた。
「ミャンマーの良い面しか見ていなくて、都合良くステレオタイプで捉えていたんだなと感じています。最初の印象ってだんだん慣らされていきますよね。ミャンマーの精神的な豊かさと言っても、やっぱりスマホをずっといじっているようなミャンマー人もいるし」

もちろんミャンマーに行きたい気持ちはある。現地に身を置きミャンマーや上座部仏教の深淵に触れたい。でも、この状況では行こうとは思わない。クーデターに加え、新型コロナウイルスの感染拡大で、宮原とミャンマーの関わりの未来は、当分不透明な状況が続く。
「今の状況に対し、何もできない。その落胆はあります。デモに行ってみたはいいけど自分は何やってるんだろうって感じたり。でも、続けていることを後から振り返った時に、自分にとってだけかもしれないけど価値はあるんだろうなと思います。そうした、日々の感じたことを綴っていきたいです」

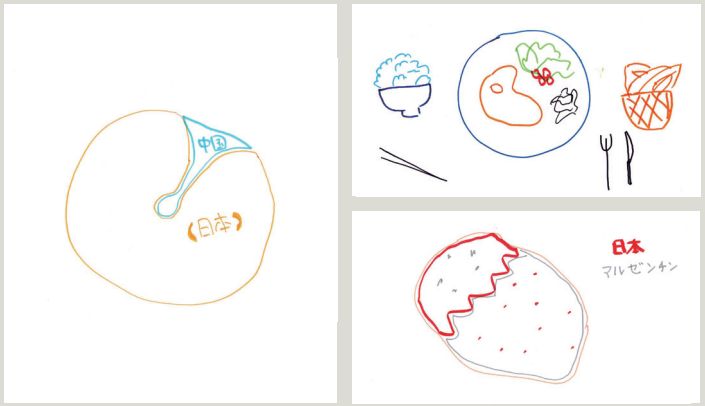
ミャンマーでは民主化指導者アウン・サン・スー・チー率いる国民民主同盟を中心に、民主派市民や少数民族などが結集し国軍への不服従運動を続けるが、国軍は国際社会からの非難を無視しながら激しい弾圧を続けている。ミャンマーの人権団体によると、国軍の弾圧で4月までに子ども40人以上を含む民間人500人以上が死亡した。

上海と水元公園と子ども

2020年2月24日、戈文来（か・ぶんらい）は、葛飾区のJR金町駅前にいた。7年以上にわたりほぼ音信不通状態だった母を待っていた。
そわそわしながら待っていると、しばらくして襟のついたブラウスと幅広のズボン姿の母が現れた。オーバーサイズ気味のいつも通りのパンツスタイル。少し皺が増えたが、記憶の中の母とほとんど相違なかった。
「じゃあ行きましょう」
たまに丁寧語が混じる癖のある母の一言で、近くの水元公園まで20分ほど2人で歩いていった。母から何か会話を切り出すのだろうと思い黙っていたが、何も始まらなかった。
水元公園に着くと、母がおもむろに仕事の話をし出した。大学教授の母は、現在自分がどんな授業をしているかや論文の話をした。最近は事務系の仕事が増えたというような愚痴っぽい話もあった。また最近ジムでエアロビを始めたらしい。エアロビをするようなイメージがなかったので驚いた。だが“会話”と呼べるほど話が盛り上がるでもなく、母は取り止めのないことをボソボソ話すだけだった。公園の中を30分ほど歩き、戈からも話を振ってみた。健康に問題はないか尋ねたり、自分が不妊治療をしていることを伝えたが、どの話題も長くは続かなかった。
散歩を終えると「家に寄っていくか」と聞かれ、久々に覗いていくことにした。家に着くと、ヨーグルトとキウイを用意してくれた。なぜか本を2冊勧められた。戦争関連の本と、美術史に関する本だった。

———

それから1年以上が経った。戈は、Cross Way Tokyoのプロジェクトとして母



インタビュー中に描かれたスケッチ「今、自分のルーツを絵で表現してみると」

への取材を予定している。

このプロジェクトでは、母を含め在日外国人やその子どもといった背景を持つ5人に対し、彼らが親から何を受け継ぎ何を子に伝えようとしているのかインタビューしたり、絵に表現してもらったりし、記事にまとめようと考えている。
スタディ期間中に妊娠が分かり、否応なく「在日中国人2世」という自己のアイデンティティを見つめる必要性に迫られた、戈なりの“思索の旅”と言える。

私はスタディを記録する中で、戈が自分の中に自己をどう位置付けるか、終始計りかねているように見えた。
つまり在日外国人というマイノリティであり、一方で日本社会で育ち何不自由なく日本で暮らすマジョリティでもあるという矛盾的存在の自分が、苦しみや障害に直面する他者に相対する際どうあるべきなのかーといった疑問だ。

スタディでほかのメンバーとディスカッションを重ねるにつれ、戈は「自分はマイノリティ」と言いつつ、人種差別などのマイノリティをめぐる社会問題に関心を抱こうとしていない自分の存在にも気付かされたという。

戈がスタディで使用していたノートには、次のようにメモされていた。
「ブラックライブズマターや在日コリアンの(差別)問題があるのは知っていた。なぜ無関心になるのか」
「中国人の後輩に対する後ろめたさ。会社に馴染んでいない後輩に頼られるべき立場にありながら、手を差し伸べなかった」
こうした自らの心の奥底にあった“無関心であろうとする自分”を発見した。

1988年生まれの戈は、5歳になると上海の祖母のもとに送られた。
なぜ自分だけが上海で暮らす必要があるのか分からなかった。不自由のない日本での生活に別れを告げるのが嫌だった。母のとった行動は理解不能で「テレビを見たり本を読んだりやりたいことができて、日本での生活が楽しかったのに」と苛立たしく感じた。

いざ行ってみると現地の小学校では友達ができ、言葉や文化の壁も特に感じなかった。祖母も自分のことを可愛がってくれた。辛かったのは、たまの日本への帰国時に通う日本の小学校での生活だったという。
「居心地が悪かったです。“急に転入してきて急にいなくなるやつ”みたいに思われていた気がします。意地の悪い男の子がいて、その子を中心に受け入れてくれない雰囲気がありました」
その後、上海で8歳まで過ごして日本に完全帰国した。

中国出身というルーツがなければ、幼い頃の上海暮らしや日本での苦い小学校生活などの体験もする必要はなかっただろう。そんな戈が人種差別やルーツをめぐる様々な問題に無関心であり続けることは、私には難しそうに思えた。

この点について戈は「日本に帰国後、日本人と同じように生活できるようになった気楽さで自分が外国人であるという意識が見えなくなっていった」と振り返る。学校生活になじめないという感覚は自然と減ったし、受験や就職で

ルーツがハードルに変わることもなかった。
「むしろ中国語を話せるからうらやましがられ、メリットになっていきました」
当事者的体験が減ったことで、当事者に向かい合って一緒に心を煩わす必要がなくなった。ノートには「自分は多数派に入ったら安全な場所に留まり、そこから眺めているだけなのでは。都合良く外国人というラベルを利用しているだけ」と記されていた。

そして、スタディも中盤を迎えた2020年の暮れ、妊娠していることが分かった。
自分が親になる ──。
このことが、「マイノリティである痛みを忘れかけていた」という戈に、再びアイデンティティと正面から対峙することを要求してきた。

親になるとはどういうことなのか。生まれてくる子は、自分と同じように日本で暮らし、日本語を話し、日本の文化に浸って育つ。当然のことではあるものの、本当にそれだけでいいのだろうか。自分は何を子どもに伝えるべきなのか。
この時、戈の頭に浮かんだのが、自分を上海に送った母のことだった。当時は腹立たしさなどの負の感情ばかり感じていたが、よく考えれば理由もなく我が子を遠い地へ送るはずはなかった。何か母なりの、自分に対する思いがあったのではないか。

こうした引っかかりが、戈のプロジェクトの進路に大きな影響を与えた。
自分と同じような背景の人々は自らの子どもに何を伝えるべきと考えているのか、そして何より母は自分に何を伝えたかったのか。ただ、この原稿を執筆している時点で母にはまだ取材できていない。

それにしてもなぜ7年以上もの間、母とほぼ断絶していたのだろうか。気になって事情を聞いてみた。

「今の主人と同棲するタイミングで親に連絡したんです。まだ彼を紹介する前だったので、“けしからん”となってしまい…。父はその後態度を軟化させていったのですが、母はもう取り付く島もないといった感じで」

その後、母とは年に1回連絡があるかないか、といった程度の仲が続いていた。
連絡があったとしても、戈の考え方を咎たりするような内容だった。
私が話を聞く限り、母は無理に愛想良く繕ったりするタイプの人ではなさそうだ。戈は「嫌味を言わずにはいられないのかな」と笑う。

2020年2月、突然母から「散歩に行かないか」とメッセージが送られてきた。日程を調整し、冒頭の水元公園を散歩した。楽しい散歩というわけにはいかなかったが、あの日以来、不定期に写真やメッセージが送られてくるようになった。
花を花瓶に生けた写真が送られてきたり、「さっきスーパーで買い物をしてきたが、気になったから手を洗った。髪も洗ったよ。気にしすぎてもいけない」といった新型コロナの話題を独り言のように送ってきたり。戈は、「何か心境の変化があったのは間違いない」とは思うものの、まだ何でも言い合える関係ではなく、詳しく聞けていない。

だが他の家族に取材するうち、どの家族も大なり小なり複雑な事情を抱えていて、うまく折り合いをつけながらそれぞれのペースで自分や家族のあるべき形を探っていることを知った。また当事者の声を聞くことの大切さも、このプロジェクトやスタディを通して実感した。
「当事者に会うことはやっぱりインパクトがあるなと思いました。話を聞くと、現実の壁は大きく、それを変える難しさも感じます。でも問題に敏感になることができ、やれることから何か始めてみようと思えました」

“人間は社会的動物である”なんていう言葉をよく聞く*が、誰かの声に耳を傾けることは、決してその人に寄り添うためばかりではない。むしろ自らが解きほぐしていく必要がある、戈と母との関係のような人生の問題に向き合う上で欠かせない行為ではないだろうか。戈の話を聞いて、そんなふうに思った。

* 古代哲学者アリストテレスの言葉として有名だが、実際には「人間はポリス的動物である」と語ったとされる

スタディの企画立ち上げから締めくくりまでを伴走してきた、アートプロジェクトの運営経験のあるスタディマネージャーが考えてきたことを綴ります。

TEXT:上地里佳［スタディマネージャー］

うえち・りか　アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー（＊2020年度時点）

1988年沖縄県宮古島市生まれ。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了後、東京アートポイント計画「三宅島大学（2011-2013）」のアートマネージャーとして携わる（2013）。2014年より富山県氷見市を拠点とするアートNPOヒミングのアートマネージャーとして、市民とアーティスト、行政との協働のかたちを模索しながら、アートプロジェクトの現場運営を担う。2016年4月からはアーツカウンシル東京にて、東京アートポイント計画、Tokyo Art Research Labを担当。2021年4月より沖縄に拠点を移し、現在は沖縄アーツカウンシルプログラムオフィサー。

ゆるやかな変容のはじまり

「東京でつくるとしたら?」を起点に、「新たなアートプロジェクトの核をつくる」ことを試みる東京プロジェクトスタディ。2020年早春、この投げかけに阿部航太さんから返ってきたのは、異なる背景を持つ他者（ここでは主に海外にルーツを持つ方々）と関わろうとするときに生じる戸惑いや億劫になってしまうハードルに向き合い、それを越えていくための術を模索する試みでした。

近年の社会状況に呼応するように、アートプロジェクトの現場でも「多文化共生」や「多様性」をテーマとした試みが増えつつあります。異なるルーツを持つ方々と協働しながら展開されるプロジェクトや、互いの文化背景から着想した新たな表現のための試行錯誤など、さまざまな切り口からの展開がなされています。私自身、これまで海外をルーツに持つ方々とのプロジェクトに携わることもありましたが、「何か失礼なことを言ってしまうのではないか」と躊躇する感覚は身に覚えがあり、阿部さんからの返答を聞いたときにぎくっとしたことを覚えています。それは、自分自身が社会をどう見ているのかを突きつけられてしまう怖さだったのかなと思います。ただ、怖さと同時に、その感覚に向き合うことで他者との新たな関わりかたの可能性を探求できる予感がしたことも確かでした。他者との関わりのなかで自分の内側について探り、向き合うための実践を経て、どんな出会いかたや関わりかたをつくっていくことができるだろうか。そんな期待と問いを携えながら本スタディに伴走していきました。

2020年8月から活動を開始した本スタディは、コロナ禍の影響から移動すること・集うことが難しく、そもそも人と出会いづらい状況下でのスタートとなりました。しかしそういった状況だったことで、参加者が住まう近辺、友人やその知人と改めて話す場を持つなど、自らの身近な環境を見つめなおす機会になっていたように思います。それは、異なる背景を持つ他者との関わりが、自分から遠いものではなく、日常生活と地続きにあることなんだと実感させてくれるものでした。そういった活動を通して得た経験や問いをもとに立ち上がったのが、このドキュメントに収録されているメディア群です。それは約8ヶ月という限られた期間での実践ではあるけれど、今回のプロセスで得た出会いや、ことばを交わすなかで生まれた感情や気づきは、スタディ終了後も、参加者の日常生活でのふるまいやまなざしをゆるやかに変容させていく経験として引き継がれていくのではないかと思います。

私自身、このスタディを取り組むなかでの個別具体的な出会いを通して、おぼろげながらも自身のなかでハードルとしていたものの輪郭が見えてきたように思います。このドキュメントを手にとる方にとっても、それぞれのメディアが立ち上がった背景を想像しながら、日常生活のなかに多様な他者との関わりを感じたり、見つめなおしたり、ささやかでも実践を試みたり、その人にとって新たな一歩につながっていくことを期待しています。

ナビゲーター

阿部航太　デザイナー、文化人類学専攻

スタディマネージャー

上地里佳　アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー（＊2020年度時点）

運営スタッフ

鷲見洋之　ノンフィクションライター

原 堯　サービスデザイナー、広告制作ディレクター

森内康博　映像作家、映画監督、らくだスタジオ代表

メンバー

宇都木大樹　会社員、アーティスト

海上千佳　会社員

戈 文来　会社員、演出家

Ayumi Seki　大学生

鄭 禹晨　編集者

廣木眞琴　自営業

宮原朋之　ウェブメディア編集者

Naoko Yokoyama 大学生（教育、言語教育専攻）

ゲスト

海老原周子　一般社団法人 kuriya代表、通訳

ペルー、イギリス、日本で多様な文化に囲まれて育つ。慶應義塾大学卒業後、（独）国際交流基金や国連機関で勤務。2009年に移民の子どもを対象としたアートプロジェクトを立ち上げ、多文化なコミュニティづくりや人材育成を行う。2014年からは移民の若者に焦点をあて、アート活動を通じたエンパワメントプログラムを実施。2016年にEUが主催するGlobal Cultural Leadership Programmeに日本代表として選抜される。また、国と国、文化と文化、言葉と言葉の間をつなぐことをテーマに通訳としても活動し、アート専門の通訳・翻訳・企画運営を行うArt Translators Collectiveの立ち上げに携わる。2016年、一般社団法人kuriyaを立ち上げ、アートプロジェクト「Betweens Passport Initiative」を始動。

金村詩恩　ライター・エッセイスト

1991年に埼玉県で生まれた日本国籍の在日コリアン3世。父方は済州島、母方は忠清南道とソウルが故郷。大学では政治学と文化人類学を学ぶ。卒業後、都内企業で働きながら、目にしたニュースや日常をテーマとしたブログ『私のエッジから観ている風景』を開設する。退職後、2017年12月にいままで執筆した記事を『私のエッジから観ている風景　日本籍で、在日コリアンで』（ぶなのもり）として、出版する。現在は『現代思想』（青土社）、『福音と世界』（新教出版社）、『在日総合雑誌　抗路』（クレイン）、『現代ビジネス』（講談社）、『Wezzy』（サイゾー）などに、旧植民地出身者の子孫・移民・クオーター・「帰化者」の日常風景から観た社会をテーマに寄稿している。

川瀬 慈　映像人類学者

1977年岐阜県生まれ。国立民族学博物館／総合研究大学院大学准教授。エチオピアの楽師、吟遊詩人の人類学研究、民族誌映画制作に取り組む。近年は国際ジャーナルTRAJECTORIAの編集、Anthro-film Laboratoryの運営を通して、人文学における新たな知の創造と話法の開拓にとりくむ。主な著作に『ストリートの精霊たち』（世界思想社、2018年、第6回鉄犬ヘテロトピア文学賞受賞）、『あふりこーフィクションの重奏／遍在するアフリカ』（編著、新曜社、2019年）。代表的な映像作品に『僕らの時代は』『精霊の馬』『Room 11, Ethiopia Hotel』（イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭にて「最も革新的な映画賞」受賞）

アーカイブ

スタディを通して立ち上がったメディア群

スタディでの活動を終えたあと、各メンバーが立ち上げたメディアを束ねたウェブサイト「関わりの記録 Reflective Notes」を公開しました。「関わり」と一言でいってもその中身はさまざま。深い対話を交わすことから生まれたメディアがあれば、話しかけることだけで精一杯ということが伝わってくるメディアもあります。しかし、このメディア群の価値は他者との関わりの深さではなく、「関わり方の多様さ」と「それぞれの関わりを語る多様なことば」です。ここからは、メンバーそれぞれが立ち上げたメディアについてご紹介します。

ウェブサイト「関わりの記録」
https://reflectivenotes.com/

関わりの記録
Reflective Notes

ARTICLE 家族のなかで「ルーツ」が意味するもの
PODCAST 東京で宗教について考えるラジオ
PRINT CRACKL ZiNES
MOVIE 映画で「新しいまち」をつくる
MOVIE 你我
ARTICLE 日本ミャンマー個人的友好活動
PRINT わが街
PRINT Collection of Goodbyes ～別れのモノがたり～
MOVIE 何が見える?
ARTICLE YOU LDK
ARTICLE いったりきたり

ARTICLE

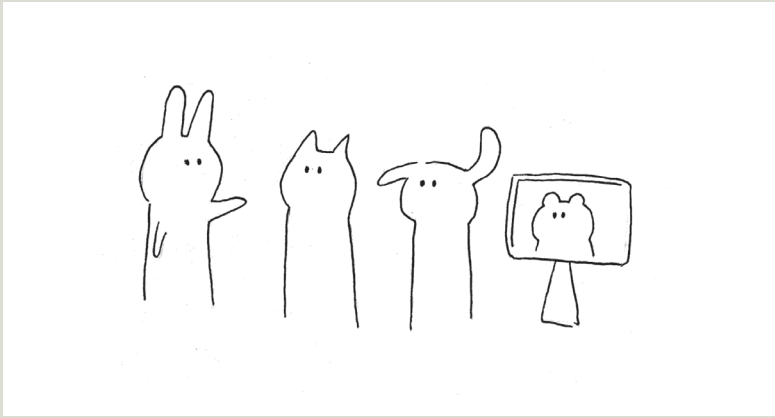
家族のなかで「ルーツ」が意味するもの

複数のルーツを持ちながら日本で生活する人たちが、世代を超えて受け継ぎたいと思っていること、新たに築いていこうとするものは、いったい何なのか。家族の記憶から現在の自身につながる手がかりを、インタビューを通して語ります。

戈 文来（Wenlai Ge）
1988年生まれ、在日中国人二世。5歳から8歳まで祖母のいる上海で暮らす。 現在はIT企業でアジア向けの事業開発を担当するかたわら、舞台作品の演出やアートプロジェクト、演劇ワークショップの企画に携わっている。

PODCAST

東京で宗教について考えるラジオ



日常生活ではあまり話題にあがることのない宗教について、東京に暮らすふたり（と、たまにゲスト）で話し合います。

あゆみ
紙メディアをつくったり調べている。
ラジオ初挑戦。

ケケ
移民のライフストーリーを研究している。
料理が好きで、特に青物野菜に目がない。

PRINT

CRACKLE ZiNES

自分自身を媒介者として友人たちとの対話の中に気づき、知り、小さく行動し始めることの短い観察記のようなものを少しずつ。

宇都木大樹

会社員 / アーティスト　国際基督教大学で社会的マイノリティとアートについて学ぶ。“Do you exist?”という問いを出発点に、アートやテキスト、仕事など様々な手法で自分自身や他者との関係性、あらゆる存在の可能性について向きあおうとしている。

MOVIE

映画で「新しいまち」をつくる

様々なルーツを持つ人々が集まり「新しいまち」をテーマとした映画をつくります。その製作過程を、映像ドキュメントとして随時更新していきます。

阿部航太

本スタディのナビゲーター。デザイン・文化人類学を指針に活動。デザイン業とあわせてブラジルのストリートカルチャーについてのドキュメンタリー映画などを制作している。

MOVIE

你我

郷に入っては郷に従うか、従わないか。在日外国人同士の他愛もない会話、東京の日常写真で綴った記録集。私たちが東京で感じた物事を随時更新していきます。

鄭 禹晨

台湾出身。東京と台北を様々な手法で記録している。異文化をテーマにした演劇、映像、美術などのプロジェクトにも携わっている。

ARTICLE

日本ミャンマー個人的友好活動

当初抱いていたミャンマーへの憧憬、実際の在日ミャンマー人たちとの交流、そしてクーデターを経た試行錯誤の個人的記録。

宮原朋之

カルチャーウェブメディアの編集者。コロナ禍以降、絵を描き、土をいじる。

PRINT

わが街

私の暮らす街で生きている海外ルーツの人々を、私はよく知らない。

廣木眞琴

茨城県水戸市の繁華街で自営業を営む（現在営業停止中）57歳男子。子どもの頃から家の周りの飲食店で海外ルーツの人たちが多数働いているのを見て育つ。

PRINT

Collection of Goodbyes
～別れのモノがたり～

“移民”“海外ルーツ”。人がカテゴリー化され、個人間の多様性が見えづらくなることに違和感を覚えた。誰もが人生で経験するであろう「別れ」を通し、“海外ルーツ”を持つ１人１人の人生ドラマを覗く機会をつくりたい。

Naoko Yokoyama

都内大学三年生。教育学と言語教育専攻。恋バナ大好き。将来は東南アジアで日本語教師をしたい。ミャンマーに平和が再び訪れますように。

MOVIE

何が見える?

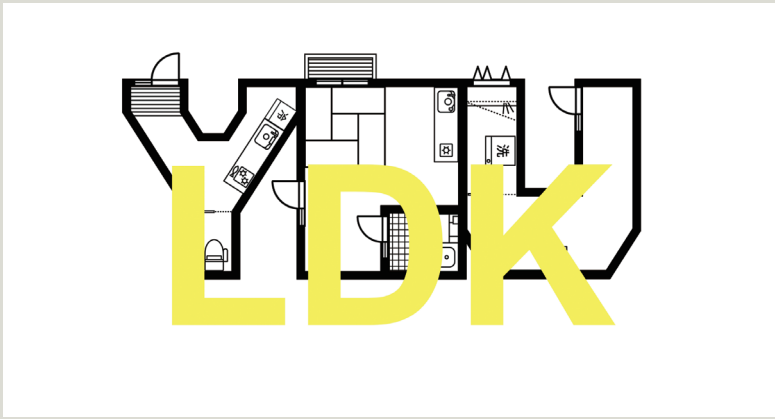
初対面の人と話す時、私は話題に困ります。そこでひとつの絵を見るという共通体験をする事で、対話の手助けにしようと考えました。

海上千佳

1983年生まれ。東京出身。

ARTICLE

YOU LDK



海外にルーツを持つ友人が、どんな部屋に住み、どんな生活をしているのか取材し、その中で許諾がとれた友人の部屋の写真とインタビューテキストを掲載します。その人のパーソナリティではなく、住まいと暮らしにフォーカスした記事づくりを目指します。

原 尭

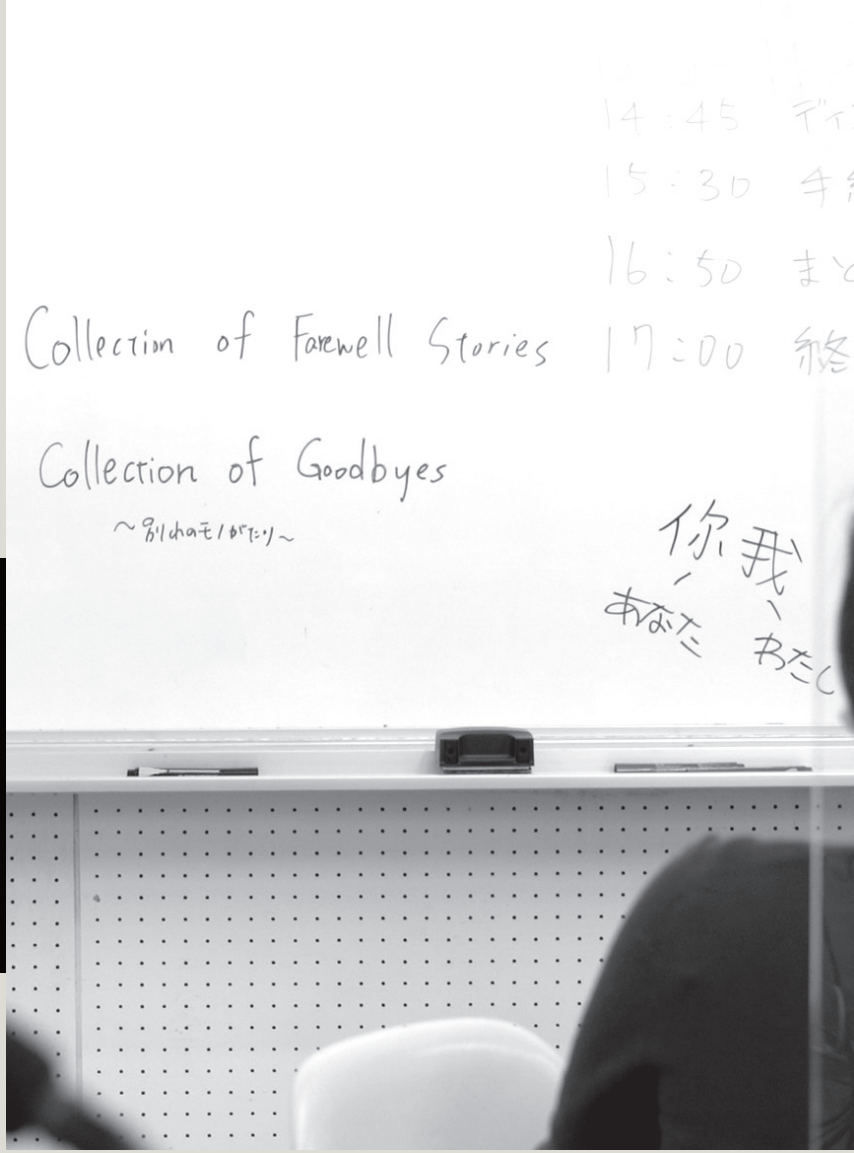
1985年生まれ、埼玉県出身。不動産メディアで新築マンションの広告制作を担当。初めての街で暮らすことをよりポジティブに捉えられるようなコンテンツづくりを目指しています。

ARTICLE

いったりきたり

異なる背景を持つ他者と出会っていくなかで、どんなことに戸惑い、躊躇し、気づきをもらいながら、関係性を積み重ねていくのだろう。とあるお店の女性店主と出会い、私の家とお店を、いったりきたりしながら考えたことを綴っていきます。

上地里佳
本スタディのスタディマネージャー。2021年からは沖縄を拠点に、文化芸術活動に携わる。



東京プロジェクトスタディ3
「Cross Way Tokyo ―自己変容を通して、背景が異なる他者と関わる」
ドキュメントブック

執筆・編集
阿部航太、鷲見洋之、上地里佳

デザイン
阿部航太

制作進行
上地里佳

印刷・製本
株式会社サンニチ印刷

発行日
令和3年7月12日

発行
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都 千代田区 九段北 4丁目 1-28九段ファーストプレイス8階
TEL 03-6256-8435　FAX 03-6256-8829
https://www.artscouncil-tokyo.jp

ISBN 978-4-909894-27-4　C0070

＊本冊子は Tokyo Art Research Lab 研究・開発「流通・発信プログラム」の一環として制作されました。

＊ Tokyo Art Research Lab（TARL）とは
公益財団法人東京都歴史文化財団　アーツカウンシル東京の人材育成事業として、アートプロジェクトを実践するすべての人々に開かれ、ともにつくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。
https://tarl.jp/

関わりの記録
Reflective Notes